



月刊バイブル（世界のベストセラー、聖書のトリビア）

第7号

発行:レムナントキリスト教会

価格:100円（送料込みで200円）

〔目次〕

- ◎聖書からのメッセージ:真理に関して(2)
- ◎高ぶりを打ち砕く:進化論の誤り(3)進化論の歴史は捏造の歴史
- ◎箴言から学ぼう!:神さまの命令を守るなら
- ◎詩篇を読む:主に身を避けるなら
- ◎キリストを信じた体験談:私がクリスチャンになったきっかけ
- ◎聖書に関する偉人のことば:W. E. グラッドストーン
- ◎ご案内

<聖書からのメッセージ > 真理に関して(2)

〔聖書箇所〕ヨハネの福音書14:6
14:6「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

<真理とは本物という意味合いである>

今回は「真理に関して(2)」として、このことをさらに見ていきたいと思えます。「**真理**」とは少し抽象的なことばですが、要は「本物」という意味合いがあります。英語で真理は、“truth”と言いますが、それと似たことば、“true”とは、試験などでの「正解」を意味します。正解、本物、それが真理ということばの意味合いです。

偽物でも本物でもどちらでも良いではない

か?という意見があるかもしれませんが、本物でないと困ることが結構あります。たとえば本物の1万円札を持っていれば、電車で町へ繰り出して映画を見ることもできますし、帰りにレストランでステーキを食べることもできます。特に問題は無いわけです。しかし似てはいても、偽の1万円札、子供が使うおもちゃのようなお札を持って行っても、電車にも乗れないし、映画も見られないし、レストランで食事もできないのです。かくのごとく本物と偽物では、大違いです。

私たちが自分の人生の行く末、また、死後の行き先などを考えるときに、色々な宗教が色々なことを言うかもしれませんが、しかし大事なことは、それが本物か、真理かどうかということです。真理、本物でないときに、死後永遠に後悔する可能性があるからです。聖書が真理である、キリストが真理であると言うときに、単にキリスト教会の間でなく、他の宗教や、その

真理に関して(2)

経典と比べてみるときに、このことが良く分かります。

<仏教の経典は釈迦に関する史実を反映していない、脚色してある>

たとえば私たちが仏教には真理があるのか？という求める心を持って仏典にあたり、また史実を調べる時に悟ることは、これらの仏典に描かれた釈迦の生涯や出来事は脚色されたものであり、オーバーに誇張されたものであり、正しい史実など何も反映していない、ということです。釈迦そのものは、紀元前5～7世紀に生きた実在の人物のようですが、彼の生涯は、彼の没後何百年も後に作成された仏典の中で脚色され、誇張され、あらゆる物語が付け加えられているようです。

その中には現実にはどうみてもありえない、SFまがいの話があります。たとえば釈迦は生まれてすぐに歩き出して、天地を指して「天上天下唯我独尊」と語ったそうです。ありえない話です。そして、このような話がいくつも仏典にはあります。

たとえば法華経では、6万恒河沙もの菩薩が釈迦の命で地から湧き出したことが描かれています。恒河沙とは、インドのガンジス川の砂の数だということです。それを6万倍するのですから、具体的には6億とか6兆とか、いや、さらに多いとんでもない数の菩薩が湧き出したこととなります。なるほど、すごい話です。しかし、これは一体、史実なのでしょう？これは西暦何年の何月に世界のどこで起きたことなのでしょう？そして、どこにこのようなことが現実に起きた、という証拠があるのでしょうか？

この出来事を書いているのは、釈迦が死んだ後、何百年も後に書かれた法華経だけであり、それを裏付ける何の客観的な歴史的資料も、目撃情報もありません。釈迦当時の歴史家が、法華経に書かれている沢山の菩薩の出現を記載して歴史に残している、などということはないのです。むしろこれらは釈迦を神聖化し、民衆のお布施を増やしたい、寺や僧侶がどんどん経典を脚色し、実際には無かった話を経典に付け加

えた可能性が高いのです。

昔の日本人、たとえば日蓮などはこれらの法華経の記述を本当に起きた事柄として信じていたようですが、現代に生きる我々を納得させるのは難しいです。これらは昔の民衆には通用したのでしょうか、今に生きる我々には何の信憑性もない、信じるにも足りない物語のように見えます。現代には通用しない、古びた教え、メッキの剥げた金のような教えのように見えるのです。

人間でも話がオーバー過ぎる人は、人から信用されません。3坪しかない庭を3千坪の大庭園を持っているかのように自慢する人や、2間のアパートに住んでいるのに、20階建てのビルを所有しているとオーバーなことを言う人は、いずれは嘘がバレて信用されなくなります。

同じようにこれらのオーバーな記述の仏典の物語は実際の釈迦の歴史から遊離しており、盛りに盛り、膨れ上がって膨張しており、もはや何が真実なのか伝説なのか分からない状態になっています。このようなオーバーな話を満載している仏典を我々はどうやって信頼し、自分の死後の世界を導く真理である、本物だと認めることができるのでしょうか？記述に嘘や誇張、でまかせがないことを真理や本物の教えや経典と考えるなら、残念ながら仏典には真理や本物があるように思えません。

じつは最初の話が、後の時代の人々の都合により脚色されたり、誇張されたりとは、人間世界ではよくあることなのです。日本の忠臣蔵の劇にしても、実際に起きたことがネタ元とはいえ、その細かいエピソードはかなり脚色されているようです。お涙頂戴の劇にし、沢山のお客を呼び込むために史実とは少し違う都合の良いエピソードがいくつも付け加えられているようです。これは劇作家や客を呼び込み、儲けを増やしたい興行の都合で話が史実を超えて盛り上がっているわけです。仏典も同じような理由で史実を超えて、どんどん話がオーバーに広がっているように思えます。人間的にはその過程は理解できるとしても、オーバーに脚色された仏典を真理だと言えるか？と言うなら、首をかしげざるを得ません。

真理に関して(2)

<聖書は過去変更されたことのない本>

さて、と言って、聖書のことを持ち出すと手前味噌のようで恐縮ですが、このような經典と比べ、聖書には水際立った特長があります。それは、聖書は、聖書こそは、後世の改ざんや変更が全く無い本だからです。聖書には改ざんが無い、そのことを如実に示す良い例として、死海写本のことが挙げられます。死海写本とは、死海の近辺で発見された紀元前2世紀頃の聖書の写本です。聖書のイザヤ書などがあります。この発見は20世紀最大の考古学発見と呼ばれています。なぜ、そう呼ばれるのか？その理由は発見された聖書写本の記述が現在使われている聖書の記述と全く同じ記述であることが判明したからです。2千年以上の時を経ても聖書の記述に何らの変更も無い、改変されていないことが分かったからなのです。ですから經典の史実の改ざんや記述の変更が無い、勝手に書き換えられたりされていない、という面を真理、本物と考えるなら、たしかに聖書こそ本物であり、真理の本なのです。

他の經典のことはいざ知らず、聖書の際立った特徴は、空想やSFや作り話ではなく、実際に起きた史実をそのまま嘘偽りなく、脚色もなく、付け加えることもなく、正直に書いている本である、ということです。この本はフィクションや物語や空想を描いた本ではなく、ノンフィクションであり、リアルなドキュメンタリーであり、また、間違いのない史実なのです。そのことに価値があるのです。

聖書には多くの人物が出てきます。アダム、エバ、アブラハム、モーセ、ダビデ、ソロモン、キリスト、パウロ、ペテロなどなどです。そしてこれらの人物は、皆実在の人物なのです。そして聖書に書かれたそれらの人物に関わる出来事も、皆実際の歴史に起きた事柄なのです。その中には奇跡的な事件もありますが、しかし大事なことは、それらが実際の歴史に起きた事柄である、ということなのです。聖書の記述の信憑性とは聖書のひとりよがり、というわけではありません。客観的な学問である考古学的にもまた、他の歴史的資料からも裏付けられています。

聖書の記述は他の歴史的な資料によっても事実である、と確認されている出来事なのです。たとえば聖書の中で代表的な人物であるイエス・キリストに関して、です。聖書の福音書にはキリストがユダヤの国で福音を伝えたこと、そして奇跡を行ったこと、最後は捕らえられ、十字架で死を迎えたことが書かれています。これらの聖書の記述は他の客観的な資料、当時の歴史家の資料により正しい事実である、と裏付けられています。

ユダヤ人歴史家であるフラビス・ヨセフス(A.D.38-100)は、ユダヤの古代に遡ってイエスのことについて書きました。ヨセフスは、「**私たちはイエスが驚くような偉業を達成した賢者であったこと、多くの人たちに教えたこと、ユダヤ人やギリシャ人からも彼に従う者が起こされたこと、メシヤであると信じられたこと、ユダヤ人指導者たちによって告訴され、ピラトによって十字架に付けられ、復活されたことを学ぶことができます。**」と書いています。これらは全て福音書の記述と一致します。

ですので、聖書の記述の一つの大きな特徴は、それが真理、本物であることにあります。フィクションや物語、よく出来た伝説ではないことを理解してください。我々が受け入れる、受け入れないは別として、聖書を書かれた神、また、聖書を通して真理を我々に語ろうとされる神は、フィクションや、ありもしない空想話、伝説を我々に語ろうとしているのではないのです。逆に真実の歴史、実際に実在した人物を描いた本、聖書を通して人生の真理を我々に語ろうとしているのです。このことを知ってください。



死海写本:聖書の記述は2000年以上もの間、変化がないことが判明した

高ぶりを打ち砕く:進化論の誤り(3)進化論の歴史は捏造の歴史

人はどこから誕生したのか?その問題に関して聖書は「神が人を創造した」と述べます。しかし日本においては、学校で進化論が教えられており、人は猿から進化したと説きます。では、その進化論は正しいのか?それをこのシリーズでは見ていきます。

すでに見てきましたように、もし進化論の言う理論が正しく、彼らの言うように、人が猿から徐々に進化したと仮定するなら、猿と人との間の中間種が存在しなければならないこととなります。しかし進化論という仮説の困難は、そのあるべきはずの中間種が世界のどこにも見つからないという現実なのです。そして困った進化論者は血眼になって発掘を繰り返し、場合によっては懸賞金さえつけて「証拠」を探してきました。そして彼らの理論を裏付けるため、場合によっては証拠をでっちあげることさえ過去に何度かあったのです。信じられないかも知れませんが事実です。

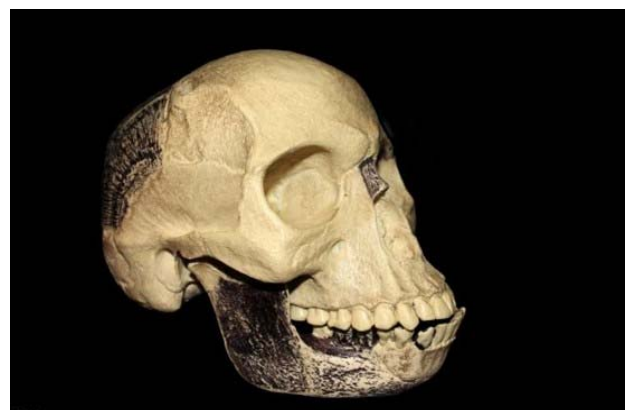
進化論の進展の途上においてなされた「でっちあげ」の例として、「ピルトダウン人」や「ネブラスカ人」の化石は悪質です。「ピルトダウン人」(ダウソンの原人)と呼ばれたものはかつて最も重要な化石の一つとされ、人の古い先祖として本の中で取り扱われました。それはほんの一握りの骨に過ぎなかったのですが、進化論を信じる画家たちはそれをもとにして、人の祖先とされる、あの毛むくじゃらの原人の姿を描いたのです。そして教科書に載せ、博物館に飾ったのです。しかしずっと後になって、ピルトダウン人は「偽作」であることが判明したのです。「発見」と騒がれてから41年後の1953年のことです。解剖学的、化学的検査の結果、この証拠は、あごは猿のもので、頭骨は現代人のものだと判明しました。そしてそれらは古く見えるように加工が施されていたのです。

また「ネブラスカ人」も、かつて人類の先祖として、もてはやされましたが、その化石とは、要するに、「**歯が1本**」だけだったのです。しかも後にその歯は豚の歯であることが判明したのです。そのほか「ラマピテクス」はオランウータン、「オルス人」はロバの頭骨だったのです。

「ハイデルベルク人」は現生人類のものでした。このように後日になってその正体が明らかにされ、進化論の教科書から姿を消した証拠が多いのです。進化論者はいまだに進化論の証拠として、幾つかの資料に固執しています。しかし今ではそれらのものも、その虚偽性が明らかにされています。

進化論に関して専門家たちの声を聞きましょう。英国スワンシー大学の生物学者デレク・エイガー教授は、「**自分が学生時代に学んだ進化に関する物語のすべては、今では實際上、化けの皮がはがされてしまい、受け入れられないものである**」と述べています。またアメリカ原子力委員会のT.N.タシミアン博士は、「**進化を生命の事実としてふれまわる科学者は、はなはだしく人を欺くものであり、その語るところは、最大の人かつぎとなりかねない**」と述べ、進化論を、「**ごまかしと、あてずっぽうの込み入った寄せ集め**」と呼びました。そして指導的な進化論者ローレン・エイスリー博士は、「**多くの努力が失敗するにつれて、科学は生命の起源について理論を立てなければならないが、それを立証できないという、困難な立場に立たされた**」とほとんど白旗をあげています。

進化論の歴史、それは神が人を創造した、との聖書のことばに異を唱えはしたが、しかし肝心の進化の証拠は見つからない、という挫折の歴史なのです。このことを知しましょう。



捏造されたピルトダウン人
(頭蓋骨は人間の骨、あごはサルのものである)

箴言から学ぼう！:神さまの命令を守るなら

[聖書箇所]箴言7:1

7:1 わが子よ。私のことばを守り、私の命令をあなたのうちにたくわえよ。

読んで字のごとく、ここに「命令」ということばが使われています。一般的に私たちは人からはあまり「命令」はされたくないものです。しかしだからと言って、何でも野放しにして良いか？と言うと、そうとも言えないと思います。たとえばある時、タクシーを利用することになりました。その時に運転手の方に「今日は地図を忘れてしまったから、途中までは行けるけど、近くなったら道を教えてくれるかな？」とお願いされたとします。そうしたら「さらにまっすぐに進んで、ふたつ目の信号を左に曲がって、しばらくしたら、右を曲がってください」なんていう風に説明しますよね？そしてこれはある意味運転手の方に「ああしてください、こうしてください」という風に命令することになります。そして指示をした通りに目的地へ到着した段階で、お金を支払うと思います。でも、そうではなく、どこもかしこもあなたが言われた反対の方角へ走行されたとしたら、どうでしょう？その時点で「もう、結構です、ここで降りしてください」と言って、別の手段を使うことを考えますよね？また、途中までの分はお支払いしたとしても、全額は払わないと思います。

そしてこのことは私たちが死後、永遠の命を得るか？どうか？ということにも当てはまります。もし私たちがこの世でどこまでも野放図に歩む、というときに、死後、「永遠の命」は残念ながら約束されない可能性があるのです。ちなみに「私の命令」の「私」とは、天の父なる神さまのこと指します。そして「永遠の命」を得るか？否か？は、この世での歩みに大きく関わっているのです。もっと言うなら、「永遠の命」とは、神さまの命令に従って歩んだ人が、死後、「報酬」として得られるものなのです。さらに言うなら、先ほどのタクシーの例話ではありませんが、途中までではなく、さいごまで神さまの命令を守る人に与えられるものなのです。よろしければ、神さまの命令を守る人に「永遠の命」が約束される、ということに関連する聖句が他の箇所にありますので見てみましょう。

[聖書箇所]ダニエル書9:4

9:4 私は、私の神、主に祈り、告白して言った。「ああ、私の主、大いなる恐るべき神。あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守り、恵みを下さる方。

下線の部分に目を留めていただきたいのですが、ここでも「命令」ということばが出てきます。そして「あなたの命令を守る者には、契約を守り」とあります。「契約」とは、まさに「天の御国」とか「永遠の命」のことを言われています。要は、神さまの命令を守る人には、神さまのほうでも、契約を守りますよ～、天の御国に入れますよ～、永遠の命を与えますよ～、ということ言われているのです。しかもそれだけではなく、「恵み」もいただけるのです。これは恐らく、この世においてのことだと思います。なぜかと言うと、「恵み」のところはKJV訳では「慈悲」「憐れみ」「天からの助け」と書かれているからです。現時点で、私たちが色々と困っていたり、悩んでいたるときに、神さまの命令を守る人にはこのような特典も、もれなくいただくことができるのです。しかしこれは裏返すなら、神さまのあの命令も守らない、この命令も拒否する、というときに、神さまからの助けや憐れみを受けることは恐らく無いのでしょうか。また、それだけではなく、天の御国や永遠の命が遠いものともなってしまうのでしょうか。ゆえに神さまの命令を守ることと、天の御国に入ることや永遠の命を得ることとは非常に密接な関係があることが理解できるのでは？と思います。もし、何が何でも死後、地獄（永遠の忌み、火の池）には入りたくない、あるいはこの世において神さまの憐れみや天からの助けをいただきたいと思われているのであれば、ぜひ神さまの命令を守っていきましょう。突然沢山のことはできないかもしれませんが、何か学んだことや気付いたところからでも少しずつ始めていきたいと思えます。



神さまの命令を守るなら、恵みを受ける

詩篇を読む:主に身を避けるなら

〔聖書箇所〕詩篇2:12

2:12 御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。

ひとつ質問させていただいてもよろしいでしょうか？この文章を読まれているあなたさまに、です。今まで、人に裏切られたことはありますか？No！とすかさず答えられたなら、それは珍しいと思います。自慢するわけではありませんが、著者は人さまから裏切られたこともありますし、また反対に裏切ってしまった、なんてことがあるからです。そして先ほどの質問に間髪入れずにYes！とお答えになったあなたさまに朗報があります。それが上記の聖句、「幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は」のことばです。もし、このことばをそのまま信じて実行するのなら、人聞きは悪いかも知れませんが、たとえこの先どんなに人々から裏切られたとしても、決して失望することはないのです。

少し細かいことではありますが、「身を避ける」のところはKJV訳では“trust”（信頼）ということばが使われています。つまり主イエス・キリストに信頼する人は幸いだと言っているのです。他の箇所にも同じようなことが書かれているので、よろしければ参考までに少し見てみましょう。

〔聖書箇所〕詩篇118:8

118:8 主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。

こちらの箇所でも「主に身を避ける」とあります。そしてここでも先ほどと同じ“trust”（信頼）ということばが使われています。つまり主イエス・キリストに信頼することは、人に信頼（KJV訳:信用）するよりも良い、という風になります。人間的には人を信頼したり、頼ったりすることは悪いこととは思いませんよね？もちろんそうかもしれませんが、しかし聖書はどちらかと言えば人よりも、主イエス・キリストに信頼することを奨励しています。ここで「人に信頼するよりもよい」とハッキリと書かれているからです。そして重ねて申し上げるように、人は何かの拍子にひるがえしたり手のひらを返したり、あるいは昨日まで右と言っていたのに、突如として左だと言い出したりするかもしれません。しかし唯一、主イエス・キリストは違います。もし、私たちが本当にこのお方だけを信頼して頼っていくのなら、決してそのようなことをなさることはありません。つまり主イエス・キリストだけは、どこまでも信頼するに値するお方なのであります。

大分前のことですが、ある女性のクリスチャンから聞いた話があります。その方には妹さんがいて、ふたりとも同じ教会に通っていました。そして彼女の妹さんは少し足が不自由なために歩行が若干困難な状態でした。少なくともご自分の自宅から教会までひとりで通うのは無理でした。その時にその女性の方は妹さんにこのように言われたそうです。「いい？私の言うことをよく聞いて。あなたが困難な状態は私も良く分かっているので、できるだけ助けてあげたいけれど・・・でも私に対してもそうだし誰かに助けを求める前に、イエスさまを求めてね。イエスさまを頼ることだけを考えるのよ。まずはそのことを優先してね。そうすれば天から助けが必ず与えられるから」と。一見このことばは冷たい感じに聞こえますよね？でも、その妹さんはお姉さんのアドバイス通りに、ただひたすらイエスさまに助けを求めたそうです。それも毎週の日曜日のたびにそうしているとのこと。そうしたらふしぎなことに、「良かったら自宅から教会まで送迎してあげる」というお声が、親族をはじめ、教会の人たちから毎回掛かるそうです。そういうわけで妹さんが足のために教会へ行けなかったということは一度も無かったそうです。まさに「主に身を避ける」ことを実践した結果、本当に天から助けが来たのです。

繰り返しますが、人さまのことは時として当てにならないとか、覆された～、なんていうことがあるかもしれません。しかし主イエス・キリストだけは、そのようなことは決してありません。余計なお世話かもしれませんが、もし最近、人間不信に陥っている～、なんてことがありましたら、少し視点を変えてみたらいかがでしょうか？そしてよろしければこの方を頼みとし、信頼し、望みを置いていったらいかがでしょうか？そうするとき、人さまのことがさほど気にならなくなったりするのでは？と思います。しかもそれだけではなく、天からのふしぎな助けや守りを受けたりしていくようにもなります。そしてもし生涯にわたってそのようにしていくときに、「永遠の命」が約束されますので、ぜひおすすめいたします。



主に信頼するなら、助けられる

キリストを信じた体験談:私がクリスチャンになったきっかけ(DAIKI)

私がクリスチャンになったきっかけは2つあります。1つ目は幼稚園に上がった頃です。そこは教会付属の園だったのです。そこで初めて神様、イエス様、という言葉に耳にしました。その園は土曜日が休みで、日曜日は礼拝のために開いていました。とは言っても、その頃は福音の意味などは全く分からず、「福音」という言葉すら知らないまま2年間を過ごしました。そして小学、中学共に、一切聖書的なことは学ばず、むしろ進化論など非聖書的なことをすりこまれたのです。

問題は中学の頃、私はオカルトの分野に手を出し、黒魔術（悪魔の力を借りる魔術）にまで頭を突っ込みました。黒魔術以外にも色々な魔術を行なったりしました。自分の部屋の本棚は、心霊系、魔術系、ニューエイジ系の本でいっぱいになりました。また、色々な神々をも崇めていました。神がお一人だということを当時は知らなかったのです。オカルトグッズも沢山持っており、タロットカードまで持っていました。じつはこれらのことが、クリスチャンになった第二のきっかけとなったのです。私はそのずっと前から死後の世界にも関心を持ち、その関係の本もいくつか持っていました。しかし、みんなそれぞれ違うことが書かれていて、全く釈然としないものでした。また、こんな思いも私の心に入って来ました。魔術、ことに黒魔術を行なうことが、自分の死後に影響するのだろうか・・・。

そんな中、私の母はクリスチャンになりました。その時期は明確には覚えていませんが、私がオカルトの世界にのめりこんでいる時だった頃というだけは覚えています。いつのことか、母は私に聖書の箇所を示しました。

「しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」(ヨハネの黙示録21:8)

「犬ども、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行なう者はみな、外に出される。」(ヨハネの黙示録22:15)

私は、初めはこのことを受け入れませんでした

たが、何か胸につかえるものがあったのです。しばらく日にちが経ってから、私の心に強い思いがやって来ました。「聖書の神だけが唯一の神」「聖書に書かれていることだけが、真理、真実」だと。

ほどなくして、オカルト関係の書籍物、雑誌、オカルトグッズをすべて廃棄しました。多分自分が15か16の頃だったと思います。また、いつの頃からか、「洗礼を受けたい」という気持ちも湧いてきたのです。ただ、まだその頃は洗礼の持つ意味合いも知らずにいました。また、その頃(16から17)の時、「ものみの塔」の人達が訪問してきて、色々話を聞きました。ちょうどオカルトを離れたタイミングに彼らがやってきたのです。数年間にわたって話を聞いたり、小冊子、本をもらったりしましたが、単純に言うと彼らの教えは、「地獄は無い」「イエス・キリストは神ではない」「聖霊も神ではない」「楽園は、この地上に訪れる」等々でした。しかしある時、母教会の牧師から、「あれはキリスト教とは全く関係の無いものだ。」と聞かされ、また、キリスト教書店に行った時も、ものみの塔に関する書籍があったので、購入しました。そして、その団体は異端であり、危険なものであることを知ったのです。私は、彼らと手を切りました。

時は流れ、20歳の時、私は洗礼を受けました。

以上、私が未信者の時からクリスチャンになるまでの経緯を証とさせていただきます。思えば、恐ろしくなるような道程だったと思います。クリスチャンになってからの戦いはさらに熾烈なものになっていますが、ここまで導いて下さり、また、これからも導いて下さる神に感謝いたします。

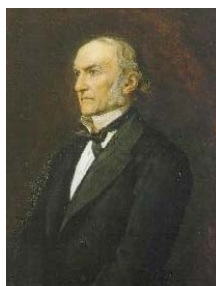


ものみの塔は、異端のキリスト教

聖書に関する偉人のことば:W.E.グラッドストンのことば/お知らせコーナー

<聖書と偉人>

W.E.グラッドストン(英国首相)



私はこの時代に、偉人と呼ばれる95人の人を知っている。うち87人は、聖書を奉ずる人であった。聖書の特色はその特異性にあり、他のあらゆる書物を無限に引き離している。

<お知らせコーナー>

●月刊バイブル無料プレゼント！(限定5名様)

月刊バイブルお読みになっていかがでしたか？もし興味があり、購読をご希望の方はお申し込みください。尚、期間限定サービスとして、申し込み順で5名様までに、本紙、送料共に「1年間無料！」で送付することにします。ご希望の方は以下を記載の上、[mail:truth216@nifty.com](mailto:truth216@nifty.com) もしくは [fax:020-4623-5255](tel:020-4623-5255) もしくは <tel:042-364-2327> へご連絡ください。先着5名様に郵送でお送りします。

「月刊バイブル無料サービスに申し込みます。」

住所:

名前:

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日/午前 10:30-12:30,午後 14:00-16:00

場所:東京都、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館 (tel:042-360-3311)

1Fのエレベーター脇の部屋表示板で、「レムナントキリスト教会」の部屋を確認ください。

どなたでも来会歓迎、入場無料です。tel:042-364-2327, mail:truth216@nifty.com

★教会のHPもあります。

ご興味のある方は、“Yahoo! Japan”で、「府中 レムナントキリスト教会」で検索ください。

尚、レムナントキリスト教会はプロテスタントの教会です。ものみの塔や統一教会とは関係ありません。

☆クリスチャンになったばかりの方やノンクリスチャンの方におすすめのサイト:オリーブ&ミルトス <http://remnantnotudoi.jimdo.com/>

☆クリスチャンの方におすすめのサイト:エレミヤの部屋 <http://www.geocities.co.jp/Technopolis/6810/>